

会津さざえ堂 (円通三匠堂)

福島県会津若松市一箕町

山間に^{きつりつ}屹立するその奇妙な塔を前にすると、包囲する空間そのものが微妙に揺らいでいるように感じられた。1796(寛政8)年、白虎隊自刃の地として知られる^{いもりやま}飯盛山の中腹に建てられた「さざえ堂」。正式名称は「^{えんつうさん}円通三匠堂」という。高さ16.5m。1階正面の入口から、滑らないように^{さん}棧が渡されたらせん状のスロープを登っていき、塔頂部あたりからいつの間にか下りのスロープをたどることになり、気が付くと1階に戻っていた。その名の通り、さざえの体内を巡るような、らせん構造なのだ。かつては、その二重らせんのスロープに沿って、内部に西国三十三観音像が安置されており、一巡りするだけで観音様の巡礼が成就したというありがたい仏堂だ。

基本的には六角形の3層構造。堂の芯部には6本の通し柱。外側の側柱も6本で、中央の通し柱とそれぞれが繋ぎ梁でつながれている。この柱に緩やかなスロープが施されている。入口の^{からはふ}唐破風の造作が見事だ。右回りの上りスロープと左回りの下りスロープが二重らせんを描き、それぞれが一方通行で全く別の通路となっているので、他の参拝者とすれ違うことなく裏の出口から降りることができる。この地にあった^{しょうそうじ}正宗寺の住職であった^{いくどう}郁堂が考案したと伝えられている。

ねじれた塔は外側から見上げると傾いて見えるが、測量の結果、垂直に建っていることが確認されたという。どこかユーモアも感じさせるこの歴史的木造建築物は、現在は個人の所有である。その奇抜さに惹き付けられるように多くの観光客が訪れる。



近代以前の二重らせん構造の建築物はヨーロッパにも現存する。かのレオナルド・ダ・ヴィンチが設計に携わったものもあり、ある調査研究によるとその天才のスケッチが会津の地にまで伝わり、郁堂はこれを基にさざえ堂を建築したともいわれる。スケッチを広げてニヤリとした郁堂の心持を想像しながらもう一度この仏堂を見上げた。正宗寺は明治初期の廃仏毀釈で廃寺となっている。

